

画本新色通

卷之四

千 4  
6377









戊申  
端月  
發兌

繪本

彩色通

画狂老久也筆

初算

山口屋藤兵衛  
小林新兵衛  
和泉屋市兵衛



重

紛色通







無筆八右衛門の日記

画を好む兒童の爲小と成り安んじおれたの事を今りおきくと  
 一小冊とあり彩色通と題と已六歳より八十八年獨立し  
 てゆるゆる思ひざりし事とゆへ今方寸の氏中に演らるる事と成  
 得べし唯赤と紅の二色とゆるゆる蓋と紙の別ちある或は方長  
 短の形を鏡赤の外の能はるるりされと編と線は冊と重なる  
 らる大洋の列は急流の尖は池は平らなる物で生る所より各  
 その強弱異なる翼ありて高く飛ぶ亦は後て實とむとては  
 まる平一かゝるものなり六千里一步の勞とゆへは世業よく提  
 ぐる同志の輩小對し鳥游がゆくも朝日の片玉と机より  
 て〜合せす的の違ざる事もある我らの道小杖突き  
 た家ある〜ともあるべきとの致

初むれ人のためす

○グとろごふんのとれとるし  
 ○アヤカリとろごふんの中へほうの  
 後の具ととろ〜をり入てその  
 りろろろ〜みく〜をり  
 ○キメとろごふんのとれとるし  
 ころりけ〜をり  
 ○カゲクマとろごふんのとれとるし  
 たく〜みぬ〜をり  
 ○テリグマとろごふんのとれとるし  
 ころり〜をり  
 ○ハル〜カケオコスアヒセル  
 ころり〜をり

阿膠彩色の事

○オホマとろごふんのとれとるし  
 大形を〜をり  
 ○フカスとろごふんのとれとるし  
 ころり〜をり  
 ○ニヂとろごふんのとれとるし  
 ころり〜をり  
 ○ハナムとろごふんのとれとるし  
 ころり〜をり  
 ○ハル〜カケオコスアヒセル  
 ころり〜をり







# 白鳳

こまろ。羽の意  
肉色とあんのつ死  
せうあん下海づま

新。毛角。えり  
肩の小まひん  
ひぎくのアヤカリ

小ぼろ。海ぎ  
大ぼろ。いんごのアヤカリ  
なまろ。糸まのアヤカリ  
さまろ。ひぎのアヤカリ

はるたね。肉のアヤカリ  
あまののアヤカリ  
二ま。いんごのアヤカリ  
ろんごあんを細く



ひぎのたろとみは角より羽の下の  
殺へるて肉のアヤカリ  
ろへ細くとあんのろ入

はつ毛  
ひぎ  
ごま

御の肉  
次ふろり

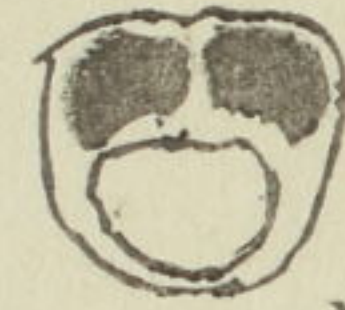
さま尾



小たねつたね  
あんのつたね  
ごま



ひぎ  
ひぎ  
ひぎ



ひぎの上を  
ひぎのつたね

ひぎのつたね  
ひぎのつたね  
ひぎのつたね

御の肉  
次ふろり

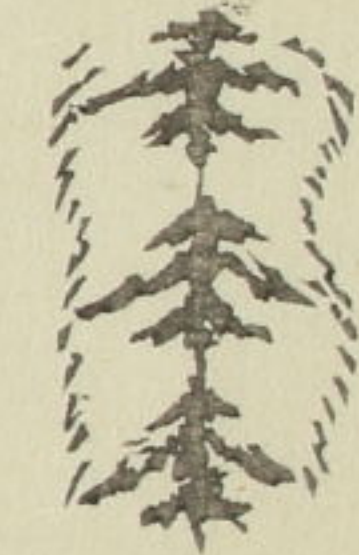
ひぎの中  
ひぎのつたね  
ひぎのつたね  
ひぎのつたね



眼



目次 猪鬃 目  
くら目の中へ見ると  
目ぢりせうあんぐ



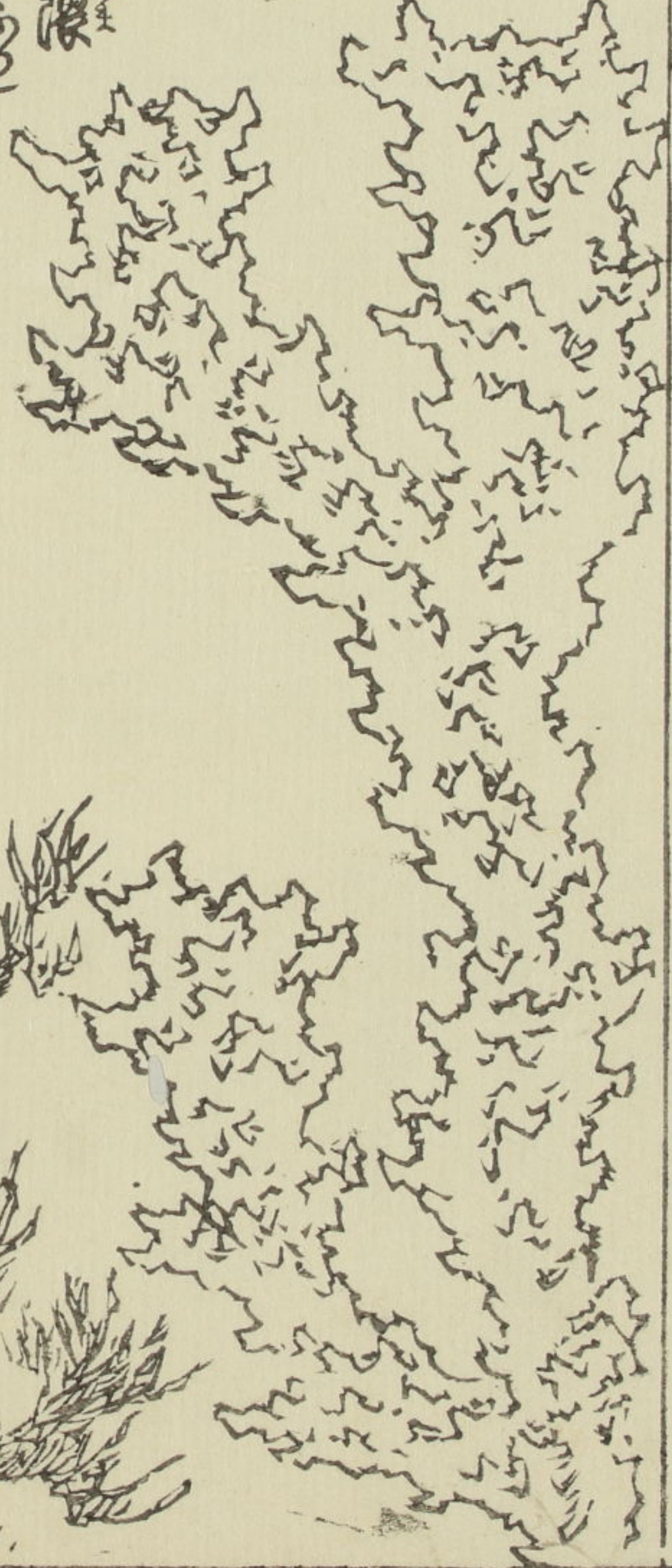
そん尾  
中へ  
ごあんぐ



くら尾  
目  
あのごん

麒麟角

角の光つ  
黄のふゆて  
かつごん  
一たいとび  
ろくせぬり  
ごんごん  
えよりバロのあじ  
かろびのあじ



万年草

せんかんさう  
せんかんさう  
せんかんさう

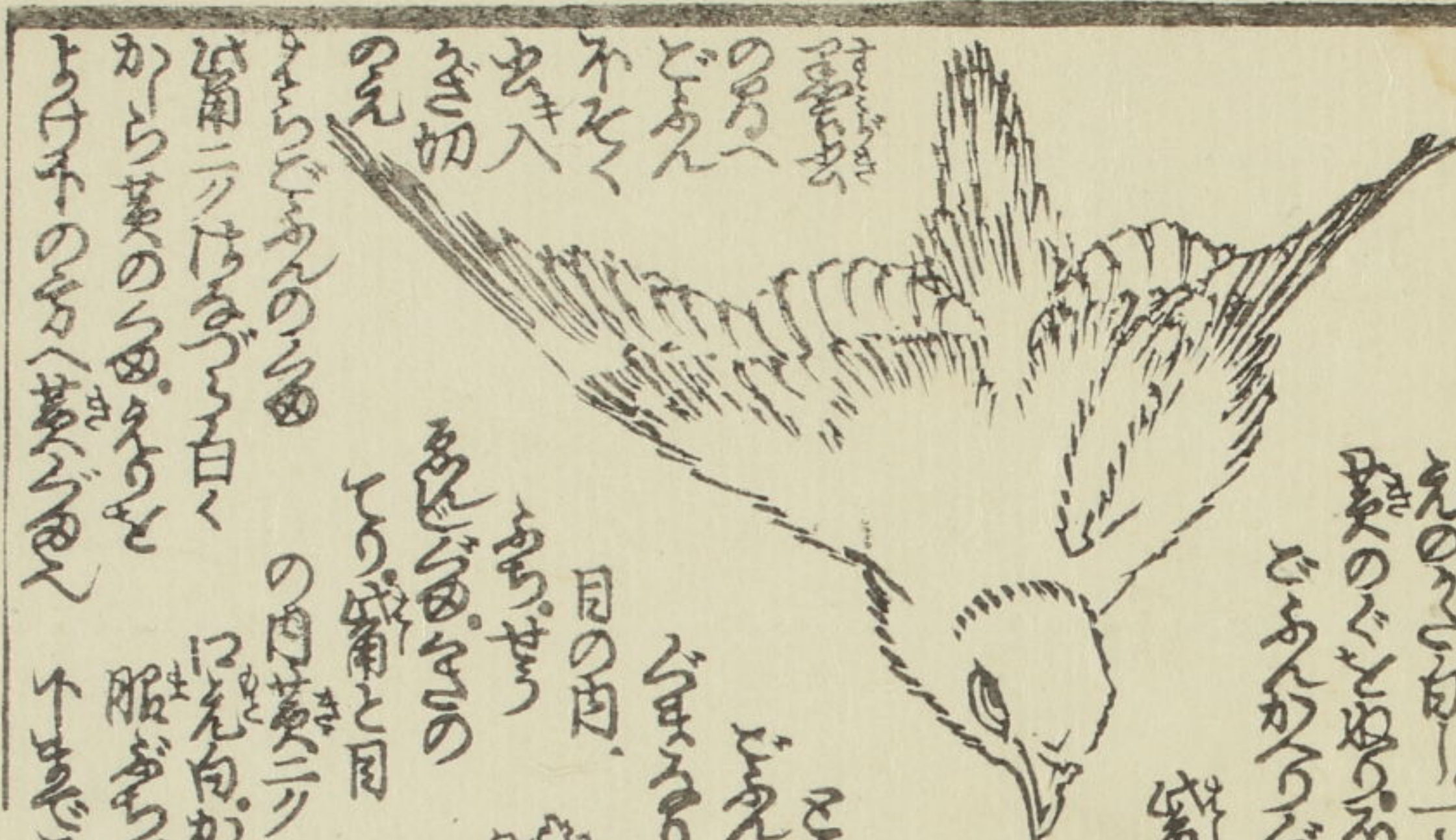


カナアリヤ

カナアリヤ  
カナアリヤ  
カナアリヤ

鳥骨鶏

鳥骨鶏  
鳥骨鶏  
鳥骨鶏



目  
の  
光  
の  
光  
の  
光

鳥骨鶏  
鳥骨鶏  
鳥骨鶏

五

五











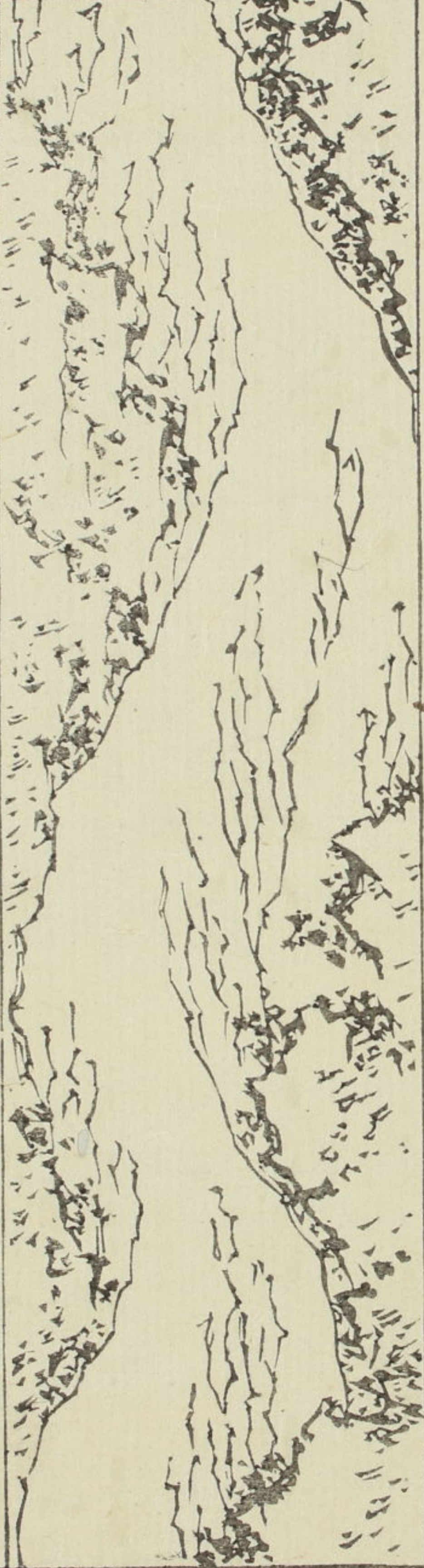
九き石ふよりとりして  
 りくちく金うけ



水の瀧の隈をとり上へ流すのキメを鏡白くしてりくちく金うけ  
 かり隈をとり上へ流すのキメを鏡白くしてりくちく金うけ  
 ひちくのキメをかけてんさあふ玉うけりくちく金うけ  
 又ひちくをとり上へ流すのキメを鏡白くしてりくちく金うけ  
 かるるの和濃あまのキメを鏡白くしてりくちく金うけ  
 であんより下よりであんを吹く木の葉を鏡白くしてりくちく金うけ

瀑泉

水脈をけりて下より上へ流すのキメを鏡白くしてりくちく金うけ  
 あまの葉のよこへ流すのキメを鏡白くしてりくちく金うけ



瀑布

直みやくたてて下より上へ流すのキメを鏡白くしてりくちく金うけ  
 直みやくたてて下より上へ流すのキメを鏡白くしてりくちく金うけ



瀑布の







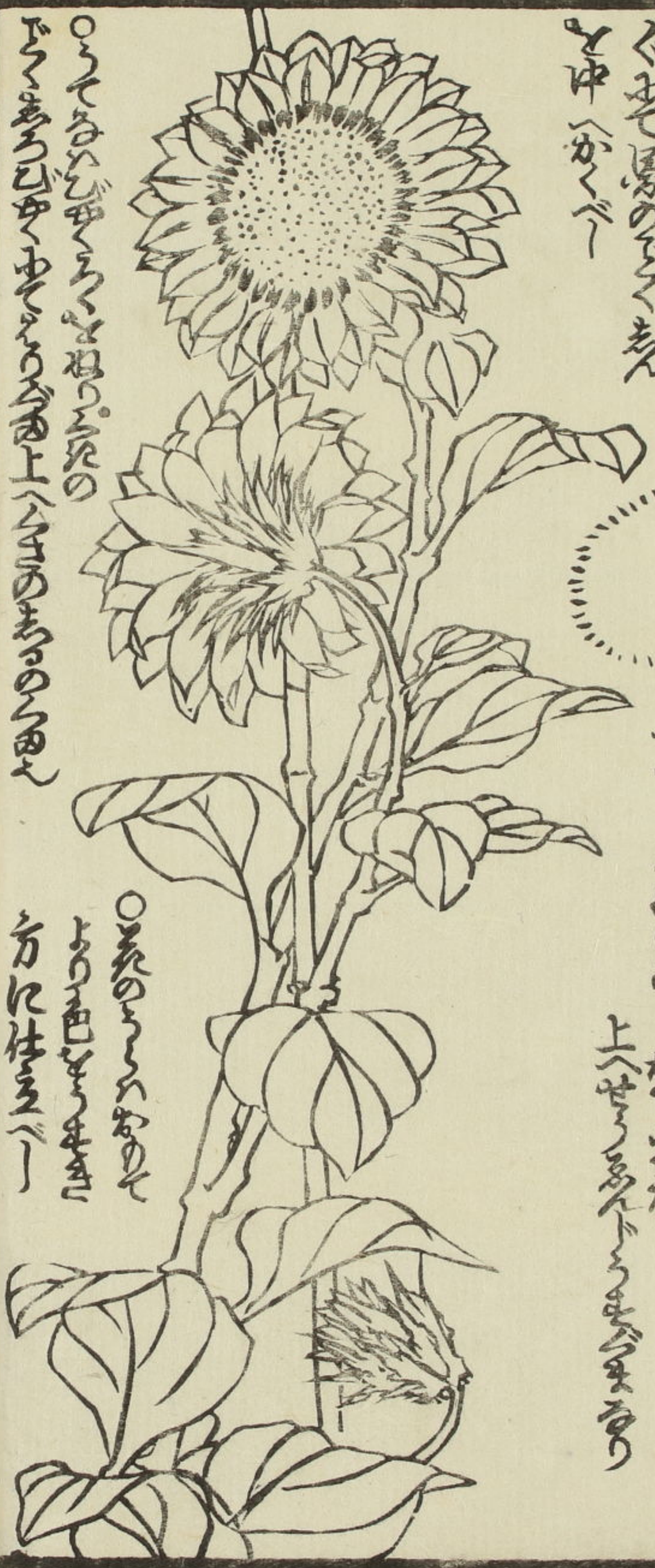




# 迎陽花

いまりり。○その葉は丸く大なるたねをばらばらに開く。花は白く、夏の末に白がらむ。花は大きき。葉は丸く、花は白く、夏の末に白がらむ。花は大きき。葉は丸く、花は白く、夏の末に白がらむ。

○花の葉は丸く、大なるたねをばらばらに開く。花は白く、夏の末に白がらむ。花は大きき。葉は丸く、花は白く、夏の末に白がらむ。



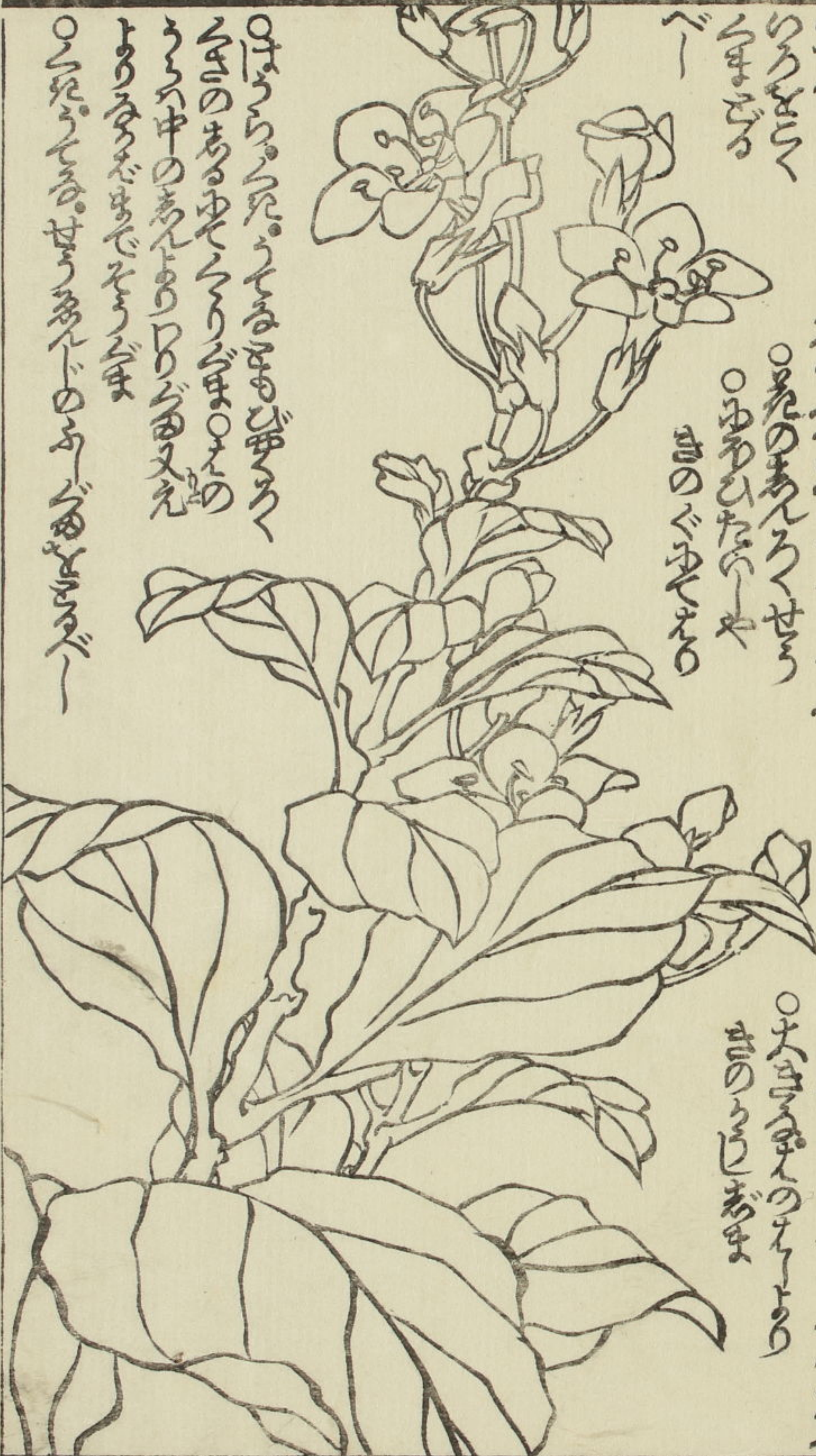
○花の葉は丸く、大なるたねをばらばらに開く。花は白く、夏の末に白がらむ。花は大きき。葉は丸く、花は白く、夏の末に白がらむ。

○花の葉は丸く、大なるたねをばらばらに開く。花は白く、夏の末に白がらむ。花は大きき。葉は丸く、花は白く、夏の末に白がらむ。

上は花の葉は丸く、大なるたねをばらばらに開く。花は白く、夏の末に白がらむ。花は大きき。葉は丸く、花は白く、夏の末に白がらむ。

# 烟草

たばこ。○花は丸く、葉は丸く、大なるたねをばらばらに開く。花は白く、夏の末に白がらむ。花は大きき。葉は丸く、花は白く、夏の末に白がらむ。



○花の葉は丸く、大なるたねをばらばらに開く。花は白く、夏の末に白がらむ。花は大きき。葉は丸く、花は白く、夏の末に白がらむ。

○花の葉は丸く、大なるたねをばらばらに開く。花は白く、夏の末に白がらむ。花は大きき。葉は丸く、花は白く、夏の末に白がらむ。











鳥 ○金神と  
うまを  
ぐぬ尻

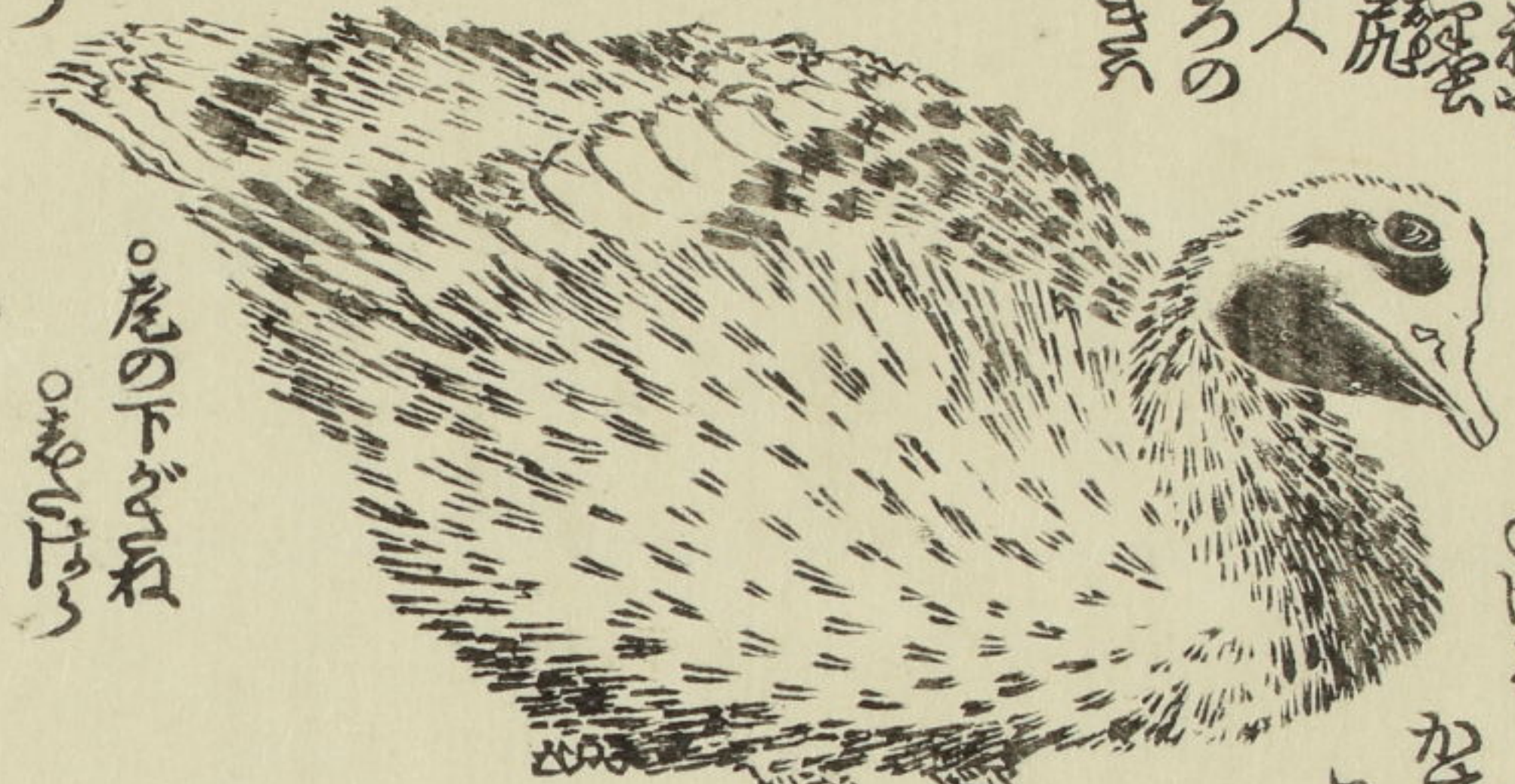
より病と人  
より腹やうの  
下より尾のま

まを腰む  
より後へけ  
てまを

目の下む  
あり尾ま  
濃まを

かまの  
羽えより  
まのま

羽えより  
羽えより  
全たいへん



○尾の下むね

○もじり

うまを  
ごまを

○はらうまを  
かひ鼻づらごまを  
とれうまを  
ごまを

ごまを  
ごまを  
ごまを

ごまを  
ごまを  
ごまを

ごまを  
ごまを  
ごまを

鳴 ○目の中、目の下  
くま。下もごまを

○はらうまを  
○また毛ごまを



○目の中、目の下  
鼻づらより

のり小むねと  
よの腹やうの

風切のりこ下  
尾だまはくあり

もじりごまを  
○もじりごまを

小むねごまを  
だれ目の下

るびごまを  
まを腰む

ごまを  
ごまを  
ごまを

○かまの  
小むね  
二まねのり

ごまを  
ごまを  
ごまを

ごまを  
ごまを  
ごまを

ごまを  
ごまを  
ごまを

ごまを  
ごまを  
ごまを

ごまを  
ごまを  
ごまを

ごまを  
ごまを  
ごまを





























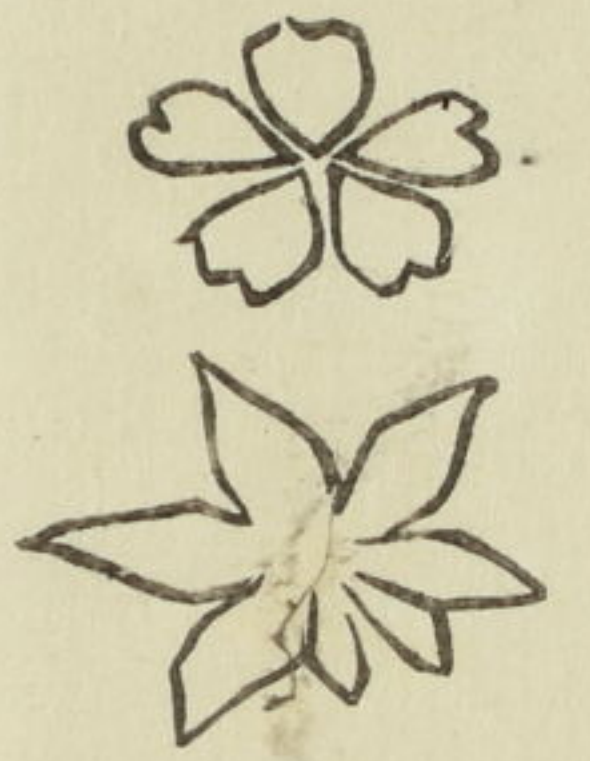


○赤い色と。萌黄いろと。黄いろの。あどと青りと。あどべー  
 ○紺・花の色。空色の極の淡黄の。あどとあはな  
 ○はなは。薄けの。あどとあどべー。○濃黄の白福の。あどと  
 ○黒い。黄の。あどとあどべー。凡てその色に。あどとあどべー  
 ○その。あどとあどべー。何と。あどとあどべー。又。あどとあどべー

○地味  
 ぬれが  
 せう  
 多ん  
 うけ  
 肉



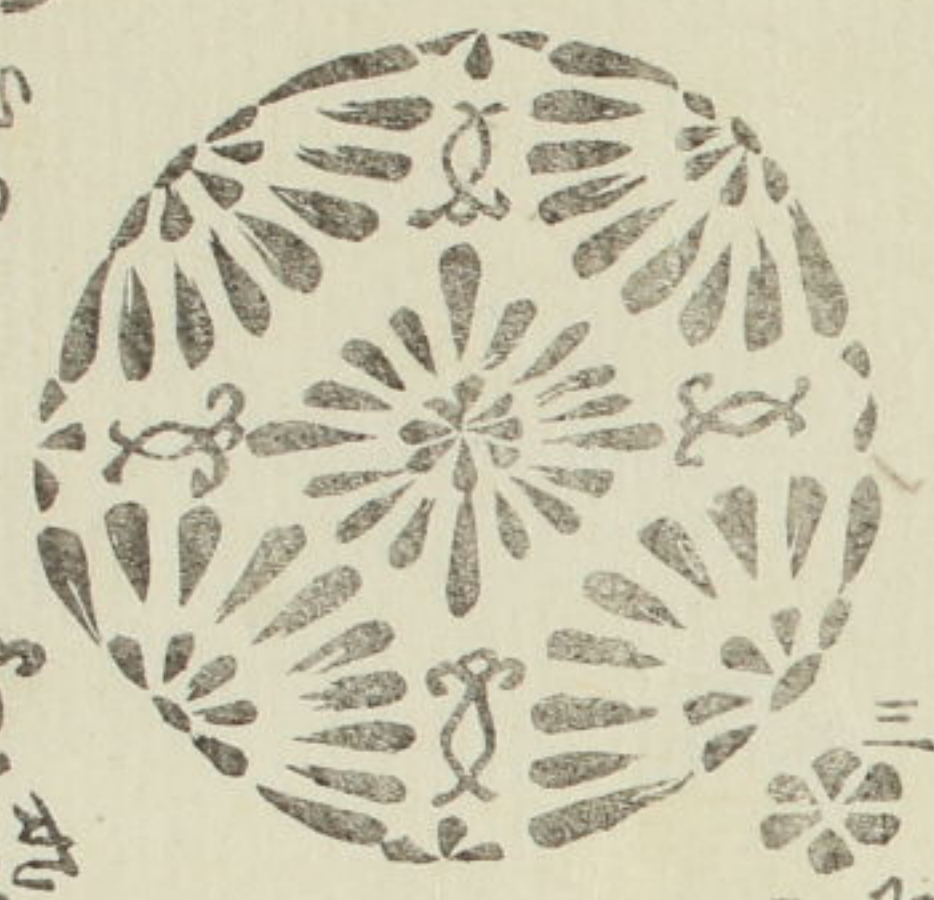
○地味  
 あどとあどべー  
 ぬれが  
 せう  
 多ん  
 うけ  
 肉



○地味  
 あどとあどべー  
 ぬれが  
 せう  
 多ん  
 うけ  
 肉

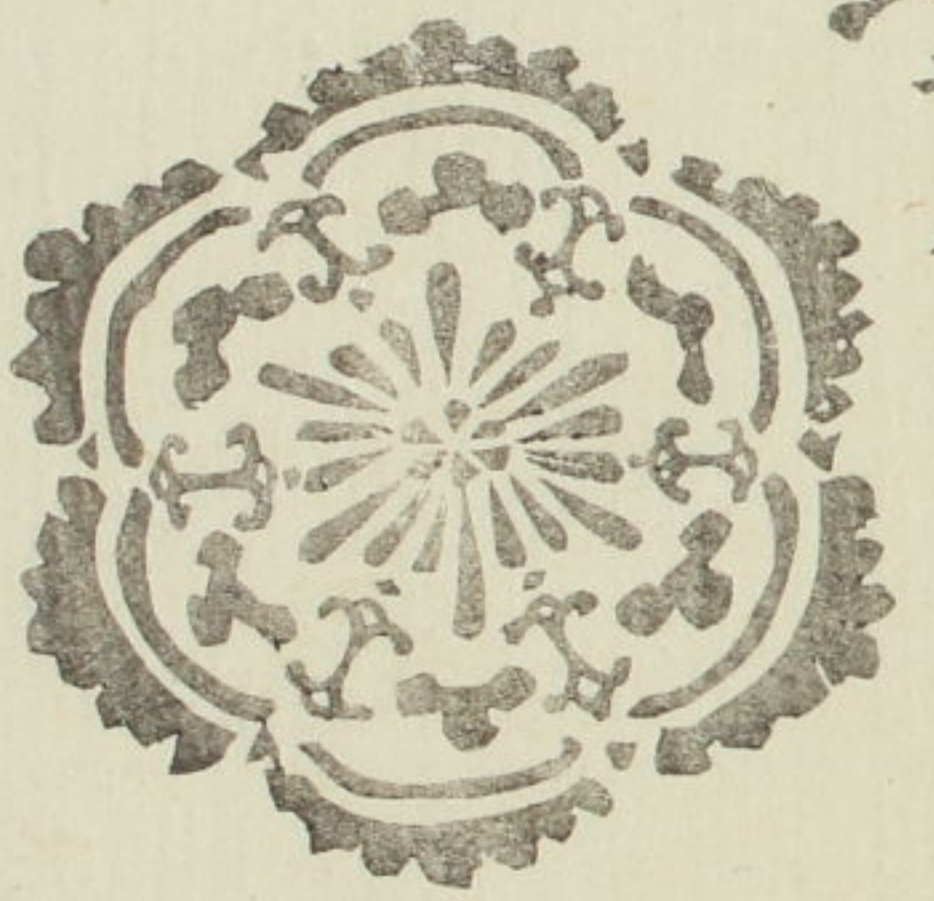


○地味  
 ぬれが  
 せう  
 多ん  
 うけ  
 肉

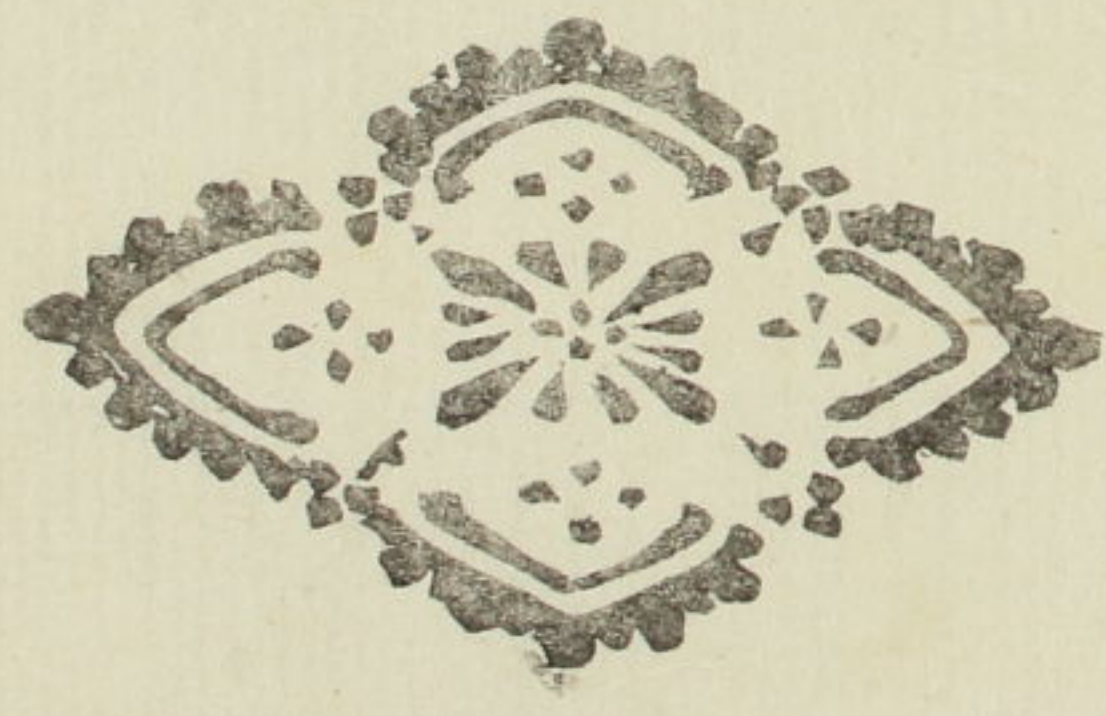


○地味  
 ぬれが  
 せう  
 多ん  
 うけ  
 肉

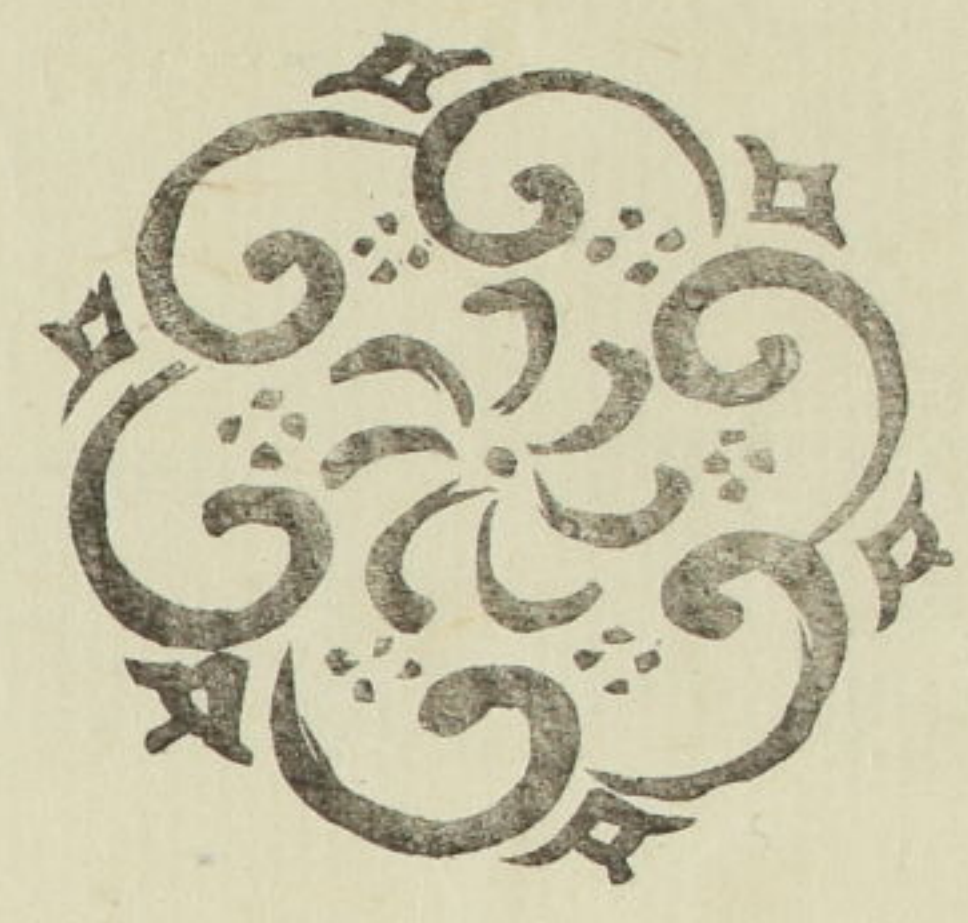
○地味  
 ぬれが  
 せう  
 多ん  
 うけ  
 肉



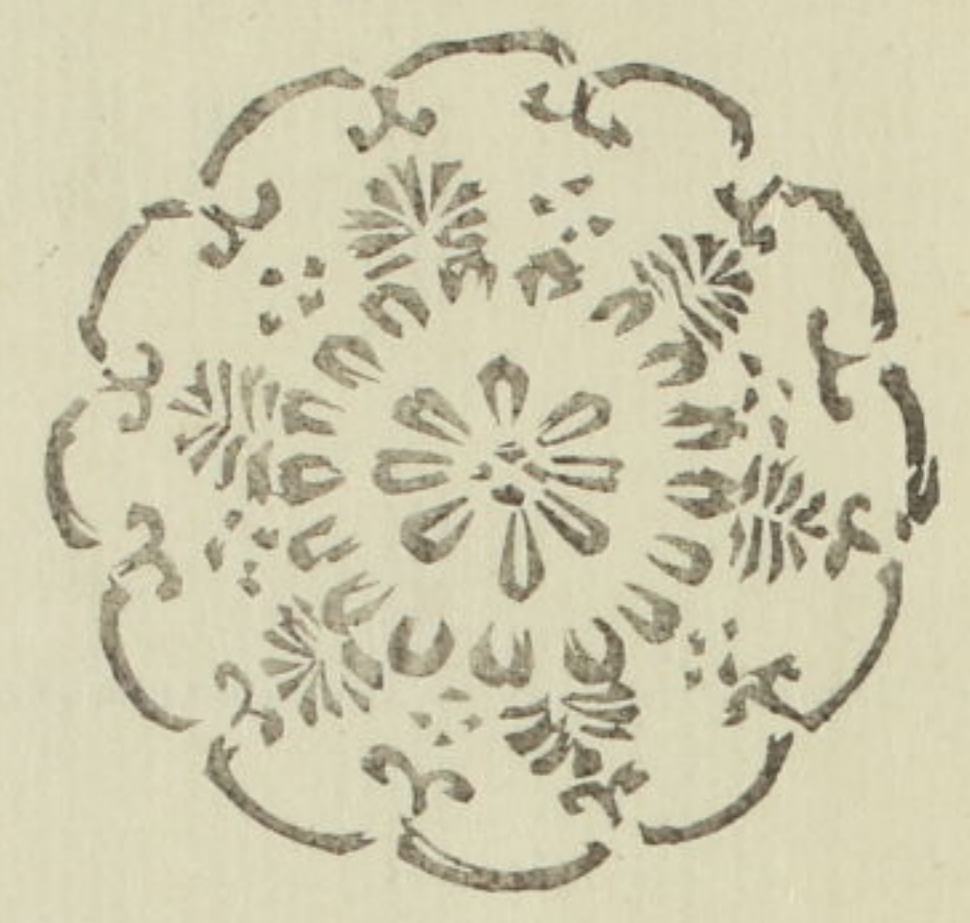
○地味  
 ぬれが  
 せう  
 多ん  
 うけ  
 肉



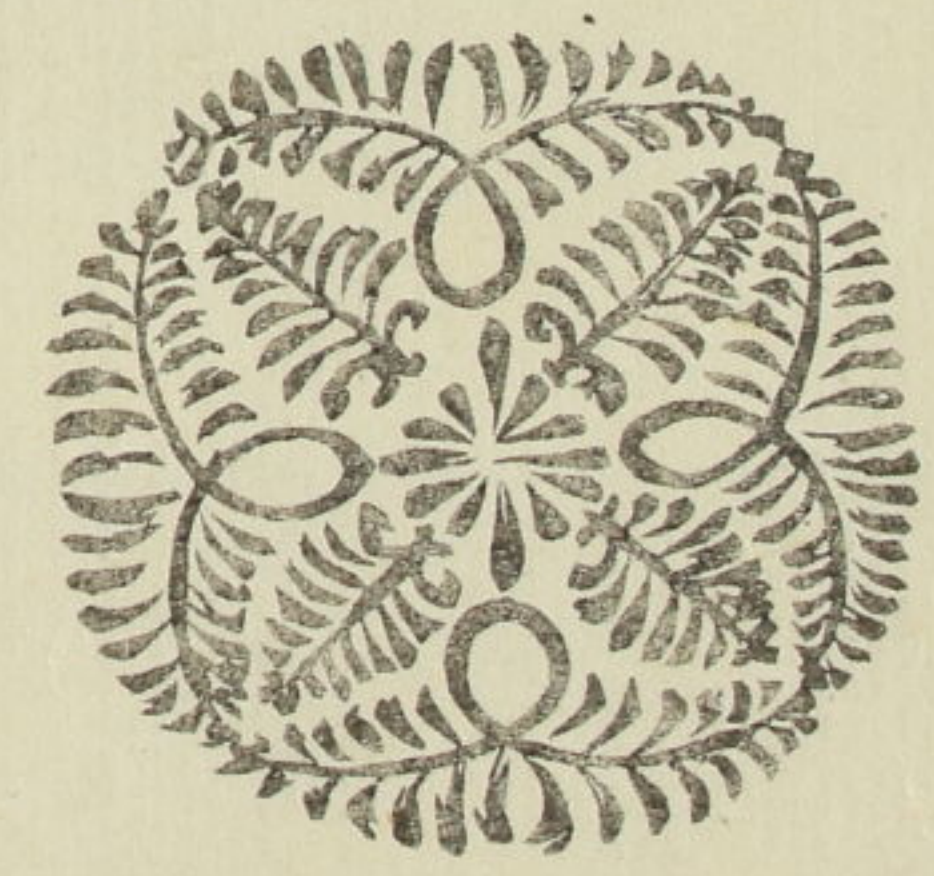




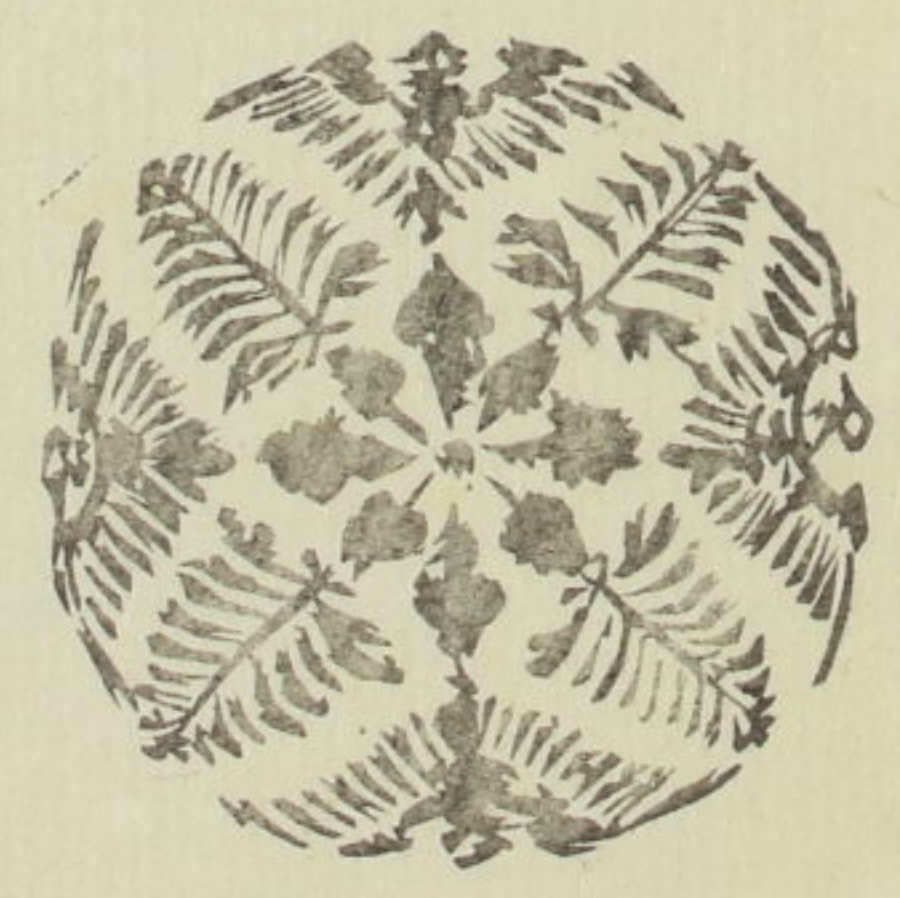
○花の巻のしるし  
ぢのりうこちて  
はかへんはなふ  
こりたまふ  
又のんはぢの  
からりてふ



○花のりうこちて  
ぢのりうこちて  
はかへんはなふ  
こりたまふ  
又のんはぢの  
からりてふ



○花のりうこちて  
ぢのりうこちて  
はかへんはなふ  
こりたまふ  
又のんはぢの  
からりてふ



○花のりうこちて  
ぢのりうこちて  
はかへんはなふ  
こりたまふ  
又のんはぢの  
からりてふ



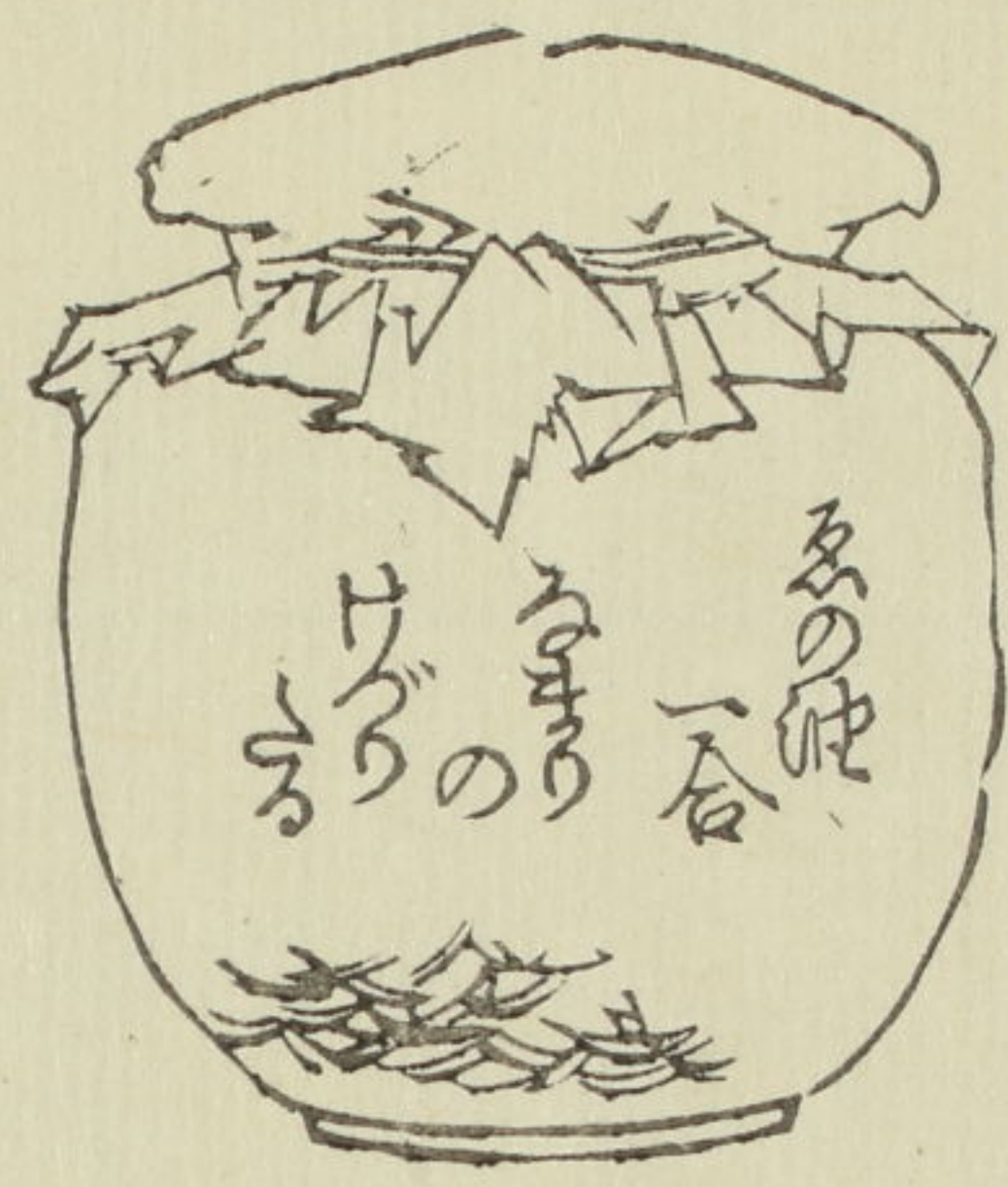






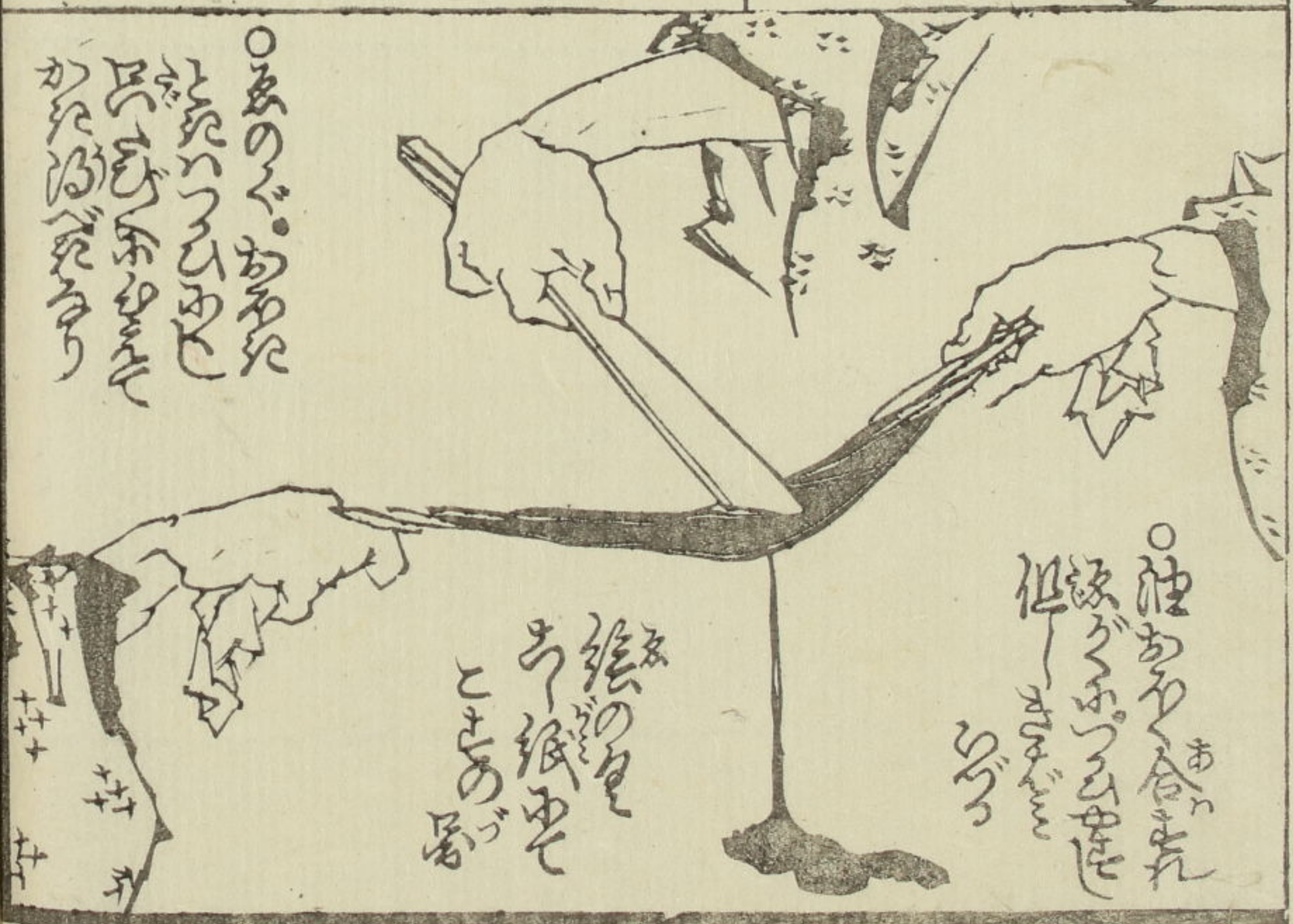
けがれりやうふ  
かばんまき

鉄炮  
七ツ  
ぶら



七日  
むらり

○虎の毛の葉のちのあつねえの  
下くみしとどうふの中へ入し黄て用



○虎の毛のあつね  
はたつていひや  
只もいひや  
かたはるる

○油あや合ま  
はくふつふま  
但し

絵の色  
あはれ  
こまの

右の繪の具晴天ふ一日干上を  
然るければ油浮を黄が  
びるかり

○油をのぐの行をも虎の毛とあつねえ  
乾方あせ

○硝子への裏より彩色をさるるあり  
表より素画して

裏よりまの隈と先(こま)

○又より地塗を一模様ハ竹の揚枝をかくその

をハ紙のタふふとあつねえ  
外の繪のぐと塗べ

○惣ての繪れぐの中(焼明礬を  
入る然るればあつねえ

○玉盤も裏より彩あつねえ  
勿論より一度ふ色の彩

色は方中是もつくと流るるの  
るまは残らむの紙の具



の中へ焼めりたんを細末しして入れよく搗交て塗るとたると  
 その塗りのたるとる絵の具あつることあり一度は彩色をあらはす  
 物より凡玉盤硝子のたぐひの自然と照のあるもの故に常の  
 生の色の油で彩色してよし  
 ○扱ヨウロツパの隈どりと天朝の彩色の隈と衣裏のた  
 びるり中華技業の共小亜細亞大州あて繪のたぐひの  
 搗搦と同どりのやうな金泥くりりまどど加へ圓方  
 浮沈のためあつた彼も知り是も辨へ畫く所死活を  
 えんばあるべからずや  
 画李彩色通 畢

繪本彩色通 初編

今おまへのおまへは通の山川草木をけつてのり魚のてびち  
 りよまわらぬ衣服のりやう人物の肉あつた武具る具ふ及びさ  
 の道具風姿のふせの月づの隈うまぐ素くねくまをくまひり  
 へ六瓣の内たりのまをくまを羅はかまて下のみをれうけまを  
 のぐれあつたまをくまを畫をまの童のおまへかまかたる成道すの  
 一本ありやうかの并まを便ひくして求めかまうまを編をつた冊を  
 宣いのうま我半余年のち終り終りせらるる悉く信んて我のふ九十  
 歳よりいふ画風を改め百文の後みいうてふは道を改革せんことを  
 後ふまをあらへり日々書のためなる後ありたまうの繪










新加坡

452

200







越前

越前

越前